
二二歳の手帳には

河 美子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二二歳の手帳には

【Nコード】

N1684P

【作者名】

河 美子

【あらすじ】

大学四回生の私は、新入生の歓迎コンパなど行ってる暇はないのだ。

いつまでも地下鉄を待っている。夕方のラッシュが始まっている。この空気がたまらない。

ばい煙のような匂いと、何とも言えない暑さの中、新宿までなら本当は歩いてだって行くことができるのに、いつも利用してしまう。田舎にいた時はあれほど活用していた自転車は、今はもう全くと言っていいほど乗らなくなった。

風を受けて走る心地よさは、東京でも同じと思っていたが、片っ端から盗まれて今や三台目。

鍵を頑丈にかけたつもりが、自分が番号を忘れて三台目はまだ乗っていない。

今日は新宿での新入生歓迎コンパというので、地下鉄に乗って行くつもりが、電車がいつも的人身事故で動かない。毎日、どれだけの人が自殺しているのか、考えると恐ろしい。大学に入った頃は、事故と聞くと不安になったがもう四年目となると驚くことはない。

ただ、早く動いてくれと願うだけになった。この神経が自分でも許せない時がある。

企業の内定は未だ貰えず、人の歓迎会に参加してどうすると、親の叱責が聞こえてきそうだが、仕方ないのは教授の一言があったからだ。

「三枝君、悪いけど歓迎コンパに出てもらえないか」

「えっ、私ですか。幹事は木下君ではなかったですか」

「実は彼の面接が最終審査に残ってるからって」

「わあ、先生、私はまだ一つも受かっていないんです」

「うん、ごめんごめん。招待するから頼むよ。映画研究会の最初の受賞は君の脚本で通ったんだから」

遠藤先生はとても学生に人気のある五〇代の教授だ。本当は学生

のコンパに出てくれることなど、他のサークルでは考えられないことだった。だが、遠藤先生は二年前ご息子が交通事故で亡くなつて以来、映画の好きだった息子がどんなことを期待したり悩んだりしていたのか、同じ場所に身を置きたいとこのサークルに入って下さった。

「君はどこに就職したいの」

「先生、もう五〇社過ぎたあたりから、どこでも入れてくれるならという気になってきました」

「そうか、今は氷河期だからなあ」

「先生、どこかないでしょうか」

「うーん、僕もこういう業界には縁が無くてサークルに入れてもらつたぐらいだから」

「いいえ、映画やテレビなんてもうとつくに諦めてます。出版も軒並み落ちました」

「そうか、学生映画祭に入賞したって書いたか」

「ええ、もうどこでもアピールしました。でも、嫌味に聞こえてしまったのでしょうか。自尊感情は下がりっぱなしです」

「そんな気分転換にコンパは出てくれよ」

「わかりました。祝杯でないのが残念ですけど」

そう言つて研究室を出ると、受かった一団が楽しそうにゼミの部屋で話していた。彼らは安定した公務員と証券会社だった。勉強も優秀で授業も前向き、今更ながらもっと勉強しておくんだつたと後悔せざるを得なかった。

そんな彼らのそばで一人読書をしているのは花田浩介だった。彼は掴みどころがない感じで、サークルにも入らず、かといって文学青年という雰囲気も感じないのだが、見かける時はいつも学校で本を読んでいた。四回生ともなると、もう授業はあまりないので彼と会うのも久しぶりだった。

「おっす、元気」

私は少しおどけて話しかけた。

「ああ、三枝か」

「何読んでるの」

「これ、手話の本」

「えっ、どうして」

「うん、ちよつと読んでみたくて」

「知らなかったなあ、そういうことに興味があるなんて」

「別に興味というわけではないけど」

「じゃ、どうして」

「知り合いの人が聞こえなくて、もっと話したいなあと思って」

「ふーん、私にも教えて」

「まだ、読み始めたばかりだよ」

そう言って彼は読んでいた本を閉じた。私は早速彼にも聞いた。

「就職は決まったの」

「いいや、まだ。実は大学に残るつもり」

「えっ、家は許してくれるの」

「どうかなあ」

呑気な話に付き合ってられないと思ったが、なぜか彼と話していると楽しかった。彼とはあまり接点がなく、私自身サークルや友達と話すことが多くて、静かな彼と話すことは滅多になかった。恋人だった北村は、この就職戦線に入った途端にご無沙汰になったし、噂では彼女もできたみたい。あまり腹も立たないのは、その位の気持しかこちらもなかったのかもしれない。

「ねえ、今は就職活動してないんだったら、何してるの」

「ああ、家の近所の中学校で中学生に補習してる」

「何、それ」

「区が塾と提携して講師を送っているんだよ」

「ふーん、何を教えてるの」

「数学と理科」

「じゃ、いずれは先生になるの」

「そんなことは考えてないなあ」

「どうして、そんなにのんびりしてるの」

「ははは、どうしてかなあ」

何だか不思議だった。こういう人が日本の大学の四回生だなんて途端に嬉しくなってきた。今まで散々面接で断られてきたから、自分が卑屈になつていた。それが、全く価値観が違うと言うか、広大な草原にのんびり昼寝をしているような人がいることに驚くとともにぱーっと気持ち晴れてきた。

手話を勉強しようとしているのは、生徒さんの中にいるのかなとか、いろいろと聞きたくなった。だが、久しぶりのゼミのチャイムが始まりを告げた。

ゼミが終わると、私は彼の働いている中学校へ行ってみることにした。彼がいつでも見においでと気さくに声を掛けてくれたから、早速この日一緒に行ってみた。

中学生は六時からポツポツやって来て、六時半にはほとんど揃つていた。私は後ろに立って、彼の授業を眺めていた。すると、彼は学校よりずっと生き生きとした声で話した。語り口は柔らかいが、ピシッと分かりやすい。天性のうまさと思つた。こんな人に数学を習ったら、私だつてもっと別の人生があるような気がしてきた。彼は塾のほうからも残ってくれと言われてるに違いない。だが、彼は贅沢なことにその気はないらしい。一体何がしたいのだろう。自分のこともよく分からないのに、人のことが気になつて仕様がなかった。みんなに練習問題を提示すると、彼は一人の中学生のところでゆっくりと話していた。

中学生は一生懸命に彼の口元を見ていた。補聴器が見えた。

そうなんだ。彼と話したいのか。

そう分かれると、私も歸りに手話を覚える気になつていた。単純だけれど分かりたかった。相手の気持ちに寄り添って考えること、私からいつの間にか抜け落ちていた。彼の見せた僅か五〇分の授業が私の心を揺さぶった。

何にも筋が通っていない私に、企業だって魅力は感じなかっただろう。そう思うと、明日からの面接のテーマも見えてきた。

彼はまだ授業を続けていたが、私は静かに教室を出た。

履歴書から書き直したかった。

会社を志望する理由を改めて書くつもりだった。自分の言葉で自分の気持ちをまっすぐに書いて、そして伝えようと真剣に思った。

翌日はやっと動き出した地下鉄に揺られ、本当は歓迎コンパどころではなかったが、一次会は出た。先生の顔もあるし、それに何だか飲みたかった。新入生は生き生きとしていて、私も本当にこんな時があつたのだろうかと思った。遠藤先生はにこにこしながら相槌を打っていた。

新入生は飲めるだろうけど、先生の前だからウーロン茶やジュースで乾杯をしていた。若者が居酒屋で集まる楽しさをこの新入生たちは覚えてしまっただろう。親元を離れてのびのびと遅くまで語り合ったり騒いだり、だが、いずれ卒業が待ってるよと言いたくなる。「悪かったね、出てもらって」

「いいえ、先生。私もこうして迎えてもらいましたから」
遠藤先生はぼそつと呟いた。

「こんな時を息子も過ごしたんだな。いいな。よかったと思うよ」
はつとした。この年頃の若者たちと重ねているだろう息子さんへの思い。

やっぱり、来てよかった。なぜか、すごく気持ちがこみ上げてきた。

「先生、さあ、どうぞ」

私はビールを注いだ。いつもはお酌など絶対にしないのに、今日は別と自分に言い聞かせた。

その夜、花田君から電話がかかった。彼は今時携帯電話を持たない人だった。

「どうだった。昨日の僕の授業」

「よかったわ。見せてもらって」

「次は大学へいつ来るの」

「私は水曜の二時限目に行くわ」

「わかった。僕もその日あるんだ」

「そう、よかったら私に手話を教えてね」

「ああ、それまでにちゃんと会話の挨拶ぐらいいは覚えていくから。
じゃ、おやすみ」

「あの」

「何」

「ううん、ありがとう。おやすみなさい」

「うん」

電話を切っても、まだ心に余韻があった。それは感じたことのないもの。彼の携帯電話が無いのは腹立たしいが、彼がかけてきたことが嬉しかった。きつとどこかの公衆電話を探したのだろう。

私は手帳を取り出し、水曜の九時半と大きく赤いボールペンで書いた。

ついでに、ハートマークも入れてみた。

二二歳だし、恋愛経験もあるのに、何だか異様にドキドキする自分がいる。

手帳をそつと閉じると、バッグの中から本を取り出した。

コンパの帰りに買った手話の本。

履歴書はまだ書いてないのに、私は本を読み始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1684p/>

二二歳の手帳には

2010年11月27日11時40分発行